今月の花「**ヒガンバナ**」　　　　　　ヒガンバナ（彼岸花）とは実にマトを射たネ

ーミングだと感心させられる。近畿地区ではほぼ

毎年ようやく暑さも和らいだお彼岸のころになる

と、赤く燃えるような花を一斉に開花し、本格的

な秋の到来を感じさせてくれる。
日本では沖縄から北海道まで広く分布するが、

固有種ではなくいつの頃か中国から渡来した帰化

植物とのことで、一説では稲の伝来と恭に入って

きたと伝えられる。山野ではなく、人里近い堤防

や田んぼのあぜ道に多いのも日本古来の花ではな

いという証であろう。ほとんどが人の手で植えら

れていったものであり、人手の入っていない山野

で見られないことから完全な自生というのはない

ようである。

**ヒガンバナ**（彼岸花、[学名](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%A6%E5%90%8D) : *Lycoris radiata*）は、[ヒガンバナ科](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%90%E3%83%8A%E7%A7%91)[ヒガンバナ属](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%90%E3%83%8A%E5%B1%9E)の[多年草](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E5%B9%B4%E8%8D%89)である。**曼珠沙華**（マンジュシャゲ、またはマンジュシャカ [サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E) manjusaka の[音写](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9F%B3%E5%86%99)）とも呼ばれる。学名の[種小名](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%AE%E5%B0%8F%E5%90%8D) *radiata* は「放射状」の意味。全草[有毒](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%89%E6%AF%92)な[多年生](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E5%B9%B4%E7%94%9F)の[球根](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%90%83%E6%A0%B9)性植物。

[夏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%8F)の終わりから[秋](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%8B)の初めにかけて、高さ３０- ５０cm、太さ１～１．２㎝ほどの[枝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9E%9D)も[葉](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%91%89)も[節](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AF%80)もない淡緑色の[花茎](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%B1%E8%8C%8E)が地上に突出し、その先端に包に包まれた花序が一つだけ付く。[包](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%85)が破れると5 - 7個前後の花が顔を出す。花は短い[柄](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9F%84)があって横を向いて開き、全体としてはすべての花が[輪生](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BC%AA%E7%94%9F)状に外向きに並ぶ。花弁は６枚で長さ40mm、幅約5mmと細長く、大きく反り返る。おしべ６本とめしべ１本は突き出し目立つが結実はしない。稀には２倍体のものもあると言われるが、ほぼ全てが３倍体であり、球根（正確には鱗茎）が自然に分裂して拡大する。

開花終了の後、晩秋に長さ30 - 50cmの線形の細い葉を[ロゼット](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%82%BC%E3%83%83%E3%83%88)状に出す。葉は深緑でつやがある。葉は[冬](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%AC)中は姿が見られるが、翌[春](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%A5)になると枯れてしまい、秋が近づくまで地表には何も生えてこない。

古くから身近にあった花であったと思われるが

  **September,2015 KNC**

詩歌などに取り上げられることは稀で、江戸時代以前の文献には出てこない。真っ赤な花色が、血や火を思わせること、また全草有毒で経口摂取すると[吐き気](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%90%E3%81%8D%E6%B0%97)や[下痢](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8B%E7%97%A2)を起こし、ひどい場合には[中枢神経](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%9E%A2%E7%A5%9E%E7%B5%8C)の[麻痺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BA%BB%E7%97%BA)を起こして死に至ることもあり、忌み嫌われたからであろうか？　　　　　　　　　　日本では[水田](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B0)の畦や墓地に多く見られるが、その目的は、畦の場合は[ネズミ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%82%BA%E3%83%9F)、[モグラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A2%E3%82%B0%E3%83%A9)、[虫](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%99%AB)など田を荒らす動物がその鱗茎の毒を嫌 って避ける（忌避）ように、墓地の場合は[虫除け](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%99%AB%E9%99%A4%E3%81%91)及び[土葬](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%9F%E8%91%AC)後、死体が[動物](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%95%E7%89%A9)によって掘り荒されるのを防ぐためとされる。[モグラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A2%E3%82%B0%E3%83%A9)は肉食のためヒガンバナに無縁という見解もあるが、エサの[ミミズ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9F%E3%83%9F%E3%82%BA)がヒガンバナを嫌って土中に住まないためにこの草の近くにはモグラも来ないともいう。有毒なので[農産物](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BE%B2%E7%94%A3%E7%89%A9)ではなく[年貢](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B4%E8%B2%A2)の対象外とされたため、救荒作物として田畑や墓に栽培されたようで全国的に広がった？　　　　　　　　　鱗茎は[デンプン](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%83%B3%E3%83%97%E3%83%B3)に富むが、有毒成分であるリコリンを含む。[水溶性](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B4%E6%BA%B6%E6%80%A7)で長時間水に曝せば無害化が可能であるため、凶作時や戦時の非常時に食用とされたのであろう。花が終わった秋から春先にかけては葉だけになり、その姿が食用の[ノビル](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%93%E3%83%AB)や[アサツキ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%B5%E3%83%84%E3%82%AD)に似ているため、誤食して中毒を起こしてしまったケースもあったようである。　　　　　　　　　　　　　　　　　なお、日本に野生するヒガンバナ科の草本には　ヒガンバナの他、①ショウキズイセン（黄色花）、②シロバナマンジュシャゲ（白色）、③アケボノショウキラン（黄橙）、④ナツズイセン（桃色）、⑤オオキツネノカミソリ（橙色）、⑥キツネノカミソリ(橙色）が知られる。